

進もう！ " 35 " へ！

「初夢円かに迎う元旦の天」

木村 岳風

明けましてお目出度うございます。

皆様お揃いで良き年をお迎えのことと存じます。

す。

「令和」の元号に親しみ、新天皇のご即位を祝った昨年でありましたが、私たち「千代田」の一年にも前進成果と明るい話題が満ちみちていました。

会長 鈴木 精成

新しい教場が二か所（四月の石神井教場、八月の金町教場）誕生し、両教場とも順調な活動を続けています。新教場を含む千代田・三〇の拠点はそれぞれ内容に相異はあるものの、一年間活発な活動を進めてきました。その結果、昨年一月の会員数は三〇七名でしたが、十二月には三三八名となっています。三〇名以上の新しい吟友を迎えたわけです。

六月の「全国吟道大会」での合吟コンクールにおける我が男子チーム堂々の優勝は、これからの輝かしい記録として語り継がれていくことでしょう。一〇名の選手はもとより、支えた千代田の吟友全員の誇りです。

久し振りの「吟行会」（十月二〇日）では石田匠風吟楽部門長をはじめとするスタッフ皆様のお世話で参加六九名が群馬・暮坂峠の「牧水碑」前で大合吟を行い、深まる上州路の晩秋に溶け込みました。特に、夕暮れ近くまで現地でお待ちいただいた渋川岳精会の皆様との交流が出来たことは大きな感動でした。改めて渋川の郡司精政会長さんと皆様にお礼申し上げます。

昨年ブロック毎の「温習会」が十一月十二月にかけて開催されました。それぞれのブロックが限られた条件の下で、工夫を凝らして取り組んでいたと思います。会に参加して特に印象に残ったことは会員お一人おひとりが、詩吟が好きで自分の「詩吟」を究めようとしていること、自分の作

品（漢詩、俳句等）を発表する意欲、新体詩・律詩への幅の広がりへの取り組みです。これからの成果が期待できます。

さて迎えた令和二年、私たちはまた新たな希望をもつて前進したいと思っています。

今年のスローガンを左のように掲げます。

「進もう！ " 35 " へ 吟声高らか!!」

" 35 " とは「来年度の千代田創立三五周年」、「目指す教場数三五」、「会員数三五〇名」ということです。この取り組みのため、左記の方針、内容を進めます。

一、「吟友（とも）呼びの日」運動、三年目継続、推進しよう。

一、四、七、十月の最初の教場の日を中心に、新しい会員さんをお誘いしましょう。

二、諸研修（「層別」「女子部」「自主」）を充実させよう。

「研修の千代田」は今年も万全です。積極的に参加し成長のキッカケをつくりましょう。

三、ブロック毎（またはブロック交流）温習会を推進しよう。

四、「武道館コンクール」出場を目指そう。

オリンピック・パラリンピックの今年、競技者たちの活動に心躍らされることと思いますが、私たちも教場での活発な活動で心躍る一年にしましょう。



「令和」最初の秋の昇伝審査会

毎年、文化の日十一月三日の開催が恒例となっている岳精流の奥伝以上及び師範審査会が今年も川崎市の「かわさき保育会館」で開催され、千代田から五四名が受験し、全員が優秀な成績で合格しました。昨年の五二名を二名上回る過去最多の合格者数でした。

内訳は実技審査に九段七名、皆伝三名、八段五名、七段十一名、奥伝六名の三二名が受審。

師範試験に皆伝師範一名、奥伝師範九名、準師範十二名の二二名が受験し、合計五四名となります。長年にわたる新会員の入会と、会員の階層別研修などの会としての取り組みと各教場での指導が実を結んでいると言えます。

また、準師範に合格された教場長が三名、副教場長が五名とすでに指導実績があるのも我が千代田の特色です。

合格の皆さんおめでとうございます。

皆伝

奥伝

皆伝師範

三ツ井龍愛（神楽坂）
渡邊 龍華（清水）
萩原 龍晴（ハザマ支部）
森田 準風（丸の内支部）
鵜飼 輝風（東陽町支部）
滝沢 春風（ハザマ支部）
日吉 薫風（ハザマ支部）
井田 舜風（生田）
清水 清風（生田）
野沢 龍寿（丸の内支部）

奥伝師範

準師範

菟場 一風（丸の内支部）
田尻 映風（丸の内支部）
中内 博風（金町）
田村 璃風（東陽町支部）
勝村 忠風（神楽坂）
宮川 丞風（神田）
丸山 育風（ハザマ支部）
鈴木 政風（ハザマ支部）
大飼 勇風（ハザマ支部）
館脇 悠山（丸の内支部）
上村 逸山（丸の内支部）
近藤 美山（丸の内支部）
吉田 紀山（日暮里）
長谷場 純山（鎌倉）
笠 泰山（桜ヶ丘）
武藤 弘山（桜ヶ丘）
森坂 雄山（清水）
湯浅 和山（中野）
神谷 知山（逗葉）
宮永 明山（ハザマ支部）
三島 寿山（ハザマ支部）



星野久風（清水）

皆伝審査を受審して

清水 渡邊 龍華

十月は異常気象で雨の日は実に十六日もありました。イブニンググローは僅か一日だったので、受審当日の文化の日は朝から気温も高く、コートは全く不要で良い日和でした。

指定吟題は律詩と新体詩の三題でしたが、念のためそれら全てを暗譜して審査に臨みました。幸いにして佐藤精堂先生から希望の吟題をと言われ、杜甫の律詩を力一杯吟詠しました。吟じ終えて先生から「絶句や節調の間違いもなくよく出来ました」と評価され、ほっと一息をつき、為し遂げた達成感に浸ると同時に額に汗が滲んでまいりました。想起起こしますと平成十二年に故飯田前会長様から、私の長い人生で初めて詩吟の何たるかを教えて頂きました。嘗て通勤していた本社の一室で楽しく和気藹々と学んだことが走馬灯のように浮かんできます。それから二十年弱の間、鈴木会長はじめ諸先生から詩吟の奥深い意義を懇切丁寧にご教授されました。私が今日まで八百首近くの吟と共に歩み、そして皆伝審査を受験することが出来たのも多くの先生のお陰があったからです。ここにそのご恩に対し熱くお礼申し上げます。誠に有難うございました。私は健康に留意し、終生詩吟を継続して参りたいと念願しております。

今後とも何卒宜しく願いたします。

米寿を迎え楽しく元気に

丸の内支部 森田 準風

令和元年十一月三日、昇伝審査が行われました。受付で渡された資料には既に昇格後の伝位が書かれていて、まだ試験も受けていないのにも思いました。

奥伝の審査は実技のみで今回の千代田の受験者は六人、佐藤精堂先生の審査を受けることになりました。私はトップバッターで、絶句の課題吟のうちどれでもよいとのことでしたので、杜牧の「江南の春」を詠いました。更に俳句も詠えとのこと、用意していなかったのでちよつと慌てましたが、芭蕉の「古池や」を詠いました。先生は俳句について一部ご指導された上で、いいですねと言って下さいました。私に続いて五人の方々が詠われましたが、さすが奥伝の受験者だけあって、何方も立派な吟を披露して下さいました。午前中に終了することができ、早々に会場を後にしました。

これで奥伝「風」の雅号を頂くことになったのでしようが、何かもう行くところまで行ったという感じです。年齢も今年米寿を迎え、今更何の欲もありません。あとは楽しく元気に過ごせればいいなと思うこの頃です。

奥伝を受審して

ハザマ支部 滝沢 春風

朝夕肌寒さを感じる十一月三日、晴天に恵まれ

川崎駅の時計前八時待合せで会場に向かつて奥伝受審するに至り、早いもので入会して十二年程になります。ここまで続けてこられたのも会長はじめ諸先生、仲間の皆様のお陰と感謝しております。

審査の佐藤先生の前に立つと、緊張で喉がカラカラで声がよく出ていない様に思いましたが「江南の春」と俳句「明月や」を無事に吟じ終えることが出来ほつと致しました。これからも流統の真善美を頭に、少しでも味のある吟を学びたく、ご指導宜しくお願い申し上げます。有難うございました。

皆伝師範を受験

丸の内支部 野澤 龍寿

令和元年十一月三日、皆伝師範受験の機会を頂きました。皆伝師範という重みに実力不足を感じ、次回にしたいと思いましたが、平成九年先輩のお誘いを受け入会したのですが、自身の入院や姑の介護と休会も多くなりました。今まで各先生方のご指導に感謝し、長年続けたご褒美と思い受験させて頂くことにしました。当日皆伝師範受験は四名でした。八十歳過ぎでの一夜漬けも如何かと思いましたが、勉強したのですが、失念もありショツクでした。「資格のあとに実力はついてくる」とも言われます。「指導とは伝導、伝達、共に学ぶこと」と宗家の言葉を大切に、自己流が多くなれば伝統は続かなくなります。流統の基本を大切にしっかりと伝えていきたいと思ひます。感謝！

準師範合格に際して思うこと

逗葉教場長 神谷 知山

今回の試験項目の中に、宗家の平成三十一年指標「香氣」について所感を述べよとありました。「香氣」は、私なりに解釈しますと日本の伝統文化から放たれる良きかおりであり、例えば来年のオリンピックでの「おもてなし」に通じるものがあるのではないのでしょうか。これを詩吟で言うならば、吟ずるときの「詩情」に通じるものではないかと思ひます。今までどちらかと言えば技術的に片寄った吟じ方を重視しておりました。今後はこの「詩情」を吟でどう表現し、いかにしたら「香氣」あふれる吟じ方ができるか、努力してみたいと思ひております。

準師範を戴いて

桜ヶ丘教場長 笠 泰山

教場長を拝命して早や二年。このたび準師範資格を戴きました。

教場は素晴らしいメンバー揃いで、最高の集団だと感謝しています。教場のため、仲間のため、を常に念頭においてくれているメンバーです。働く女性が多く、多忙な中での練習ですので非常に緊張があります。練習後の食事会では話題が豊富でついでに行くのに懸命です。

メンバーは吟歴が浅く、最高の雅号が「山」です。皆が学び合っている状況ですが、それだけに五年後、十年後が楽しみです。吟力向上も大切に

すが、彼女達が仕事を離れ、家庭を仕上げた時に活躍する場、そんな教場を作っておくのが私の役目であろうと考えています。少しでも姉妹教場を作っておく、また所属連携を活性化させておく、そこで将来彼女たちが活躍している。そんなことを夢見ています。

将来活躍する、地域をリードする、そんな彼女達の人生道場。そんなことを考えながらやると、教場長もまた楽しいものです。

吟との出会い

鎌倉副教場長 長谷場純山

一九三六年、子年。二・二六事件や伯林（ベルリン）五輪で知られるこの年に生まれた私は今年で八回目の年男ということになります。この八十余年の人生の中の吟との出会いは、二〇一一年卯年のことでした。

高校の大先輩のお誘いにより丸の内支部教場（当時丸の内教場）を見学し、住まいに程近い鎌倉教場をご紹介頂いて吟の勉強が始まりました。三月十一日でした。

その日の吟題は杜牧の「清明」でした。先生の範吟に続く会員の独吟が始まって間もなく、教室全体が揺れ始めました。東日本大震災の始まりです。揺れは激しく駐車中の車がまるでマンボを踊っているようにも見え、思わず机にしがみつきそうになりました。それでも吟者はコンダクターの奏者とともに、体を揺らしながらも途切れることなく、最後まで吟じられました。これから吟を始

めようとしている私に「中途半端で止めては駄目ですよ」と教えておられるように思えました。

あの日から八年余が経ちました。これまで私が吟を続けてこられたのは多くの先生方や吟友の皆様方のご指導ご助力の賜物であるのは勿論のことですが、この時の「清明」が少し影響しているのかなあと、いま密かに感じているところです。年毎に体調の衰えを実感していますが、今年も自分なりに吟を楽しく学んで行きたいと思っています。本年もどうぞよろしくお願いいたします。

準師範を拝受して

丸の内支部副教場長 近藤 美山

準師範を拝受しました。

思い起こせば、東日本大震災の時に入会。辞めるつもりがここまで続いたことに驚いています。「貴女に詩吟は似合わない」と友人に言われ、「似合う」ってどういうことだろう？との思いと、仲間の励ましが原動力だったと思います。

これからは、楽しい時間を共有できる教場の一員として行動していきたいと思っています。

中伝準師範を頂いて

ハザマ支部副教場長 宮永 明山

準師範の資格を取得して教場の仲間への指導が出来ることとなり、その責任の重さと喜びを感じています。

諸先輩の吟詠を参考にして自分自身の吟力の

向上、コンダクター演奏力の更なる向上に努めて、数多くの新しい会員に岳精流の節調とアクセントを指導していきたいと思っています。

皆が参加しやすい教場、皆が楽しめる教場を目指して頑張ります。

平成二十三年、東日本大震災の年に入会して早くも八年、千代田岳精会創立三十周年大会、全国吟剣詩舞道大会への参加と多くの大会にも参加してきました。今後も色々な行事に積極的に参加して、吟力を高めていきたい。

準師範試験を受けて

中野副教場長 湯浅 和山

詩吟に縁を得て八年余り、お陰様で年男の令和元年の亥年に準師範の資格を徳本副会長の模擬試験でのご指導もあり頂くことが出来ました。偏に先生方の思いやりあるご指導ご配慮のお陰と感謝申し上げます。

忘れていた筆記試験に震えるほど緊張し、未熟な自分と基本に返ることの重要さを再認識させられた次第です。

これからは人生の困難な時（諸般の事情で精神的に時間的に詩吟に打ち込めない、大きな高い声が出ない等々）真善美、教場、吟友の皆様から清々しい香氣と元気を頂けます様、先生方から教えて頂いたことの伝導伝達、そして共に学ぶ姿勢で、教場長を補佐し、教場の発展に些かでも寄与すべく、基本に返り努力して参りたいと思います。

中伝準師範試験を終えて

桜ヶ丘 武藤 弘山

はじめに、入会した時から変わりにくく忍耐強くご指導下さいました岩崎先生はじめ諸先生方に深く感謝申し上げます。

流統の節調、アクセント、読み、発声とどれも難しく、まだまだ思っているにも受験の時期はめぐってきます。「師範」の二文字が重たく、ためらっている背中を教場長が押してくれました。教場長は九州男児で熱い教場愛に満ちたリーダーです。今年は地元多摩市の夏祭りで合吟をしたり、秋の文化祭に仲間と参加したりと教場の活動の場も広がっています。仲間の半数は仕事を持つ女性達で、明るく活気のある教場です。

私の吟の歩みは相変わらず遅々としたものですが、これからも仲間と無理なく楽しみなが学べるように惜しげなく協力してまいりたいと思います。

詩吟を楽しむ

丸の内支部 上村 逸山

詩を吟ずることを楽しむために、この岳精会に入会したつもりでした。それでも早や七年以上になり、楽しむことも出来るようになったと思う。只、今回の中伝準師範試験を受ける実力はまだまだだと思っていた。指導する十分な力は皆目、自信はありません。ただ先輩から受けた詩吟をつないでいくことは出来るのではないかと思う次第で

す。これからも、先生方、諸先輩のご指導を熱心に受け自分の実力をつけることが第一と考え精進に努めようと思います。

昨年の夏、熱海で行われた師範特別研修会に参加して、その様子から流統の目指すところは吟友の相互理解と会員の確保が重要なのだと感じた次第です。

良い雰囲気の中伝

ハザマ支部 三島 寿山

準師範として指導者の立場になることに一種の緊張感を持っている。岳精流の節調を理解すると共に如何に指導するかであると思う。

一方、良い雰囲気で楽しい中伝となるように常に心掛けたい。そして吟友の増加を図ることであると思っている。

準師範審査を受けて

清水副教場長 森坂 雄山

平成二十三年十月から中野中伝に入会し満八年が経過しました。毎年十一月三日・文化の日に審査会があり、準師範を受験し合格することが出来ました。中野・清水中伝でご指導頂いている村上先生、徳本先生、細川中伝教場長、そして鈴木会長はじめ先生方には心から厚くお礼を申し上げます。

筆記試験は一〇五問まであり、事前に筆記模擬試験問題で充分に勉強しておくことが必要だと

思います。

これからも中伝の理念である「岳精会流統の吟を正しく学び、詩吟を楽しむ。心身の健康増進に資する。会員の相互啓発と交友の場とする。千代田岳精会の発展に資する」をモットーとして、努力を重ねていきたいと思っています。

第三四回国民文化祭

「にいがた二〇一九」参加

長岡で十月六日(日)開催された「吟舞の祭典」に岳精流が吟行会を企画。千代田からも十六名が参加しました。注目の全国から二十八チームが参加の合吟コンクールでは橋本淳風さん(新宿)中伝の本部女子が優勝、栄えの文部科学大臣杯を獲得しました。また第三位は三河岳精会男子と岳精流が大活躍でした。

吟行会は山本五十六記念館、春日山城他を見学。また地元の新潟支部、糸魚川営業所の激励交歓会と有意義な吟行会でした。

「吟舞祭典」五人コンクールに出場

新宿支部中伝 橋本 淳風

五人のチームが舞台の上に揃った時、会場は一寸したどよめきの後シーンと静まり返った。歩き方、歩幅も視線など十分に打ち合わせて練習したものでした。

さあスタートだ！静かな会場に尺八の音が広がってゆく、心が張り詰める。冒頭、力強く吟題「春日山懷古」大槻盤溪・作が発声され、次の瞬間「春日山頭」と透き通った、瑞々しい、そして力強い声が会場を圧倒して響き渡る。辻寛風さん渾身の出だしでした。

しっかりと息を整え五人が揃っての第一声「晚霞に鎮さる」緊張の一瞬です。マイクは一人一本、合吟の華もあり地獄ともなるところ、絶対に失敗は許されない、そして見事に揃った。パワー全開、練習で苦労した晚霞の『ば』も練習風景を見に来られた宗家の『ば』は上から被せるようにしなさい」の一言で奥行きの深い響きにと変わった。皆の呼吸が合っている。順調に進み遂に間に結句を詠い終えた時はホッとしました。この間、比較的落ち着いて詠うことが出来たのは練習のお陰であつたと思います。三月から始まって毎月猛暑の中でも渡精華先生のご指導のもと、休まず励みました。今回、全国の優れた吟者が集う中でその頂点（文部科学大臣賞）に立てたのは何と言っても渡先生の熱心なご指導の賜物と思います。

練習は勿論ですが、当日出吟直前にも着物の着付けが終わりに戻った時、先生から「何やってんの！コンクールはもう始まっている、遅い！」と思ひ切り喝を入れられました。先生の情熱と迫力を身に沁みて感じ、いやでも緊張感が高まりました。メンバーは二十代から七十代まで巾がありました。が、大変チームワークが良く舞台上に上がる直前にも自然と手を取り合って「頑張ろう」と

誓い合いました。「合吟はパワー」が渡先生の基本で、これ迄何回も岳精流を日本一に導かれております。今回私も改めて合吟について色々勉強いたしました。このような貴重な体験をさせて頂き心から感謝申し上げます。



吟行会 渋川岳精会と交歓 若山牧水詩碑を訪ねて

吟楽部門リーダー 石田 匠風

千代田岳精会としての吟行会は久しぶりです。

会員皆さんのアンケート意向調査により、日帰り観光バスの旅、関東甲信越の区域に限定し、弘報部門八田リーダーの情報を基にして群馬県の暮坂峠に行き先を決めた次第です。

日本ロマンチック街道の中間です。草津温泉と沢渡温泉の道筋に十数か所の詩碑があるそうです。今回の吟行会も渋川岳精会の郡司会長、会員の皆さんに大変お世話になりました。また地元の名酒「牧水の詩」とお菓子等の差し入れを受け恐れ縮しております。旅先で吟友に会えることは楽しいものです。感謝感激です。暮坂峠の近くは温泉が多くあります。なかでも沢渡温泉は秘湯であり、昔の湯治場です。

昼食は勝村神楽坂教場長のお薦めもあり、日本三大うどんと言われている「水沢うどん」に決めました。食後のご感想は如何でしたか？

現地は標高が一、〇八八米で紅葉もスタートしていたようです。バス旅行にしては走行距離三〇〇kmと少し長すぎたかと思えます。約一時間位遅れての暮坂峠到着でした。渋川岳精会の皆さんにはお待たせして交歓・献吟が遅れ申し訳なかったと思いました。

秋の紅葉林の牧水詩碑の前での渋川、千代田岳精会の合同献吟は若山牧水作の新作詩「枯野の旅」と短歌「夕日さす」で、歓迎してくださった山本詩碑保存会会長も七十人での献吟は初めてと感激して下さった様です。

秋の暮坂峠、寂しい枯野、牧水詩情の感ありです。渋川岳精会郡司会長と会員の皆さん、山本詩碑保存会会長、遅くまでお見送りいただき感謝、

「牧水の詩」銘酒を頂き帰路楽しみました。次回は一泊吟行会の声がありました。



中央ブロック温習会

新陵 西川 清悟

杉並公会堂小ホール。ここが中央ブロック温習会の会場となった。令和元年十一月十八日（月）清水・中野・逗葉・石神井・神田・用賀・志茂・ハザマ支部・我孫子・新陵・みなとみらい・生田

の各教場に所属する幹部先生方と会員合わせて一一〇名余（在籍者のほゞ全員）がここに集結した。

この日に向けて、四月から毎月一回開催の準備委員会を八回、現地（公会堂）の見学と打合せを二回と周到な準備を重ねてきた。当日は天候にも恵まれ、第一部の吟詠発表会は十二時から十七時の五時間を独吟・合吟・剣舞と織り交ぜた上に自作の漢詩や俳句を吟じる人もあって、極めてバラエティに富んだ構成となった。そして第二部の懇親会では皆さん疲れも見せず、若さ？を爆発させ大いに盛り上がった。

参加された方からは「憧れの杉並公会堂でまさか自分が舞台に立てるとは思わなかったので嬉しかった」「初めての舞台吟詠に大変緊張したがよい経験をさせてもらった」「伴奏やマイクの音響効果がよく、録音を聴くと自分の吟声とは思えないほどだった」「これだけ大がかりな催しを準備し支えてくれた裏方さんに感謝したい」「出場者の吟詠レベルの高さと上達ぶりに驚いた、素晴らしいかった」「楽しい懇親会で久しぶりに羽目をはずした」といった声が寄せられた。関係者一同、安堵の思いの中で次回の温習会を頭に描きつつ会場を後にした。

年男・年女

今年の干支は

庚子（かのえ・ね）です。



感謝あるのみ

会長 鈴木 精成

一巡り前の子年を思い返している。

平成二十年である。「千代田岳精会」会長の重責を仰せつかり、無我夢中の二年目の年であった。初代飯田精鷹先生もお元気でいろいろなアイデアをいただき、助けて下さったものだ。

時節は流れて十二年、再び子年を迎えた。この十二年間、無事な「吟楽一筋」を過ごして来れたことに感謝している。多くの千代田吟友はもとより、多方面にわたる人生の友に多謝である。

干支の性格占いでは、子年の者は「周りに沢山の人がいて、大人数で物事を成し遂げる」とのこと。次なる「子年」に向かって、家族、吟友ともども健康で過ごすことを祈っている。

新年にあたり

副会長 山口 精央

令和二年に当たり「庚子」として、いつも思っていることを初夢として述べてみたい。

詩吟を元気にやっている間に教場を作ってみたいと思う場所、近くでは八王子。若い時五年も居た地域である。もう一つは九州福岡である。真善美を唱えている作詞先生、松口月城の出生地である。ここへ岳精会の拠点を置かなかったことは流統の不思議の一つだと思う。松口月城先生のこの詞を毎日唱えていて、誰も思わなかったのだから。ここへの拠点設置をやりませんか、力を貸

して下さい。これは夢ではなく、やらなければと
考えている。

阿波おどりと私

副会長 徳本 龍治

私と阿波おどりととの関りは、昭和十五年十一月
の神武天皇即位紀元（皇紀）二六〇〇年奉祝で踊
ったのが最初です。

その後戦争で自粛ムードが続きましたが、戦後
GHQにより日本の伝統芸能が殆ど否定された
中、阿波おどりは「二〇〇万人のマンボ」として
好意的に許され、戦後の新時代開放のシンボルと
して県民に踊り継がれて今日に至っています。

私は中学生の頃から地元の「浦島連」という踊
り子連に加わり、高校時代まで続けました。その
後会社に入り、四国支社の四年間、協力業者の踊
り仲間と連を組み、徳島の演舞場への出場も経験
しました。以来今日まで、社員旅行や趣味の集い
等でも阿波おどりを楽しみ、八四歳の今日まで七
〇年近く踊り続けたことになりました。

私を阿波おどりに誘ってくれた二人の姉と兄
は、今は鬼籍に入り、毎年お盆は阿波おどりのテ
レビを見ながら往時を懐かしく思うこの頃です。

最後に愚作を一句。

阿波おどり 踊り続けて 八十路かな



「月のことば」を大切に

ハザマ支部 二井内壽風

令和二年、年老いた私も福男だ。八四歳まで生
きてこられた。戦後の焼け野原から食べることにす
ら大変な時に育ててもらい、社会人になるまでお
世話になった両親の顔が浮かんできました。

私が詩吟に出会った切っ掛けは、学生時代に関
西の土木学会で上映されたダム工事です。ダムに
憧れて建設会社に入り、南アルプスのダム現場に
立った時でした。ダムが立ち上がり、川の水を溜
める記念の日に、工事安全を祈願し現場で社長が
先導し全員で吟じました。

現役中はこの一回だけでした。教場に入会し、
相当な年数が経過しました。入会の頃は左耳が難
聴でした。十年経った頃、今迄よく聞こえていた
右耳が聞こえなくなりショックでした。

会を休んで家で落ち込んでいた時、当時の教場
長鈴木会長、今は亡き城戸先生から励ましの手紙
を頂きました。検査の結果、両方の耳に補聴器を
つけ三か月間慣れるか試してみた所、OKのサイ
ンが出て再度教室に出席できる様になりました。
現在は音が良く聞こえる前の席に座っています。
また吟友の熱い応援を貰っています。

『TQC(統合的品質管理)』の水平展開を応用
し夏季師範研修、各種の発表会での講評を活字に
してもらい研修に努めています。特に私が大切に
していることは、宗家の「月のことば」です。味
のある言葉でいつも勇気づけられています。

教場では年長になり、最初に吟じるため毎日発

声練習と素読をやっています。いつ迄詩吟を続け
られるか分かりませんが、九十路を目指して行け
たらと思っています。

七回目の子年に思う

新宿第四 升川 藍山

十二支のいわれを書いた童話の中で、鼠は牛の
頭に乗って神様の所に行き、神様の前でピョンと
跳び下りて干支頭になったというのがあり、孫達
が小さかった頃「おばあちゃん、ずるい」とよく
責められたのですが「牛さんの親切に助けられ
ただけよ」と言い訳をしたものです。

わが人生を振り返ってみると、確かに要領よく
立ちまわるだけの才覚もなく、家族や友人、知人
に助けられてここまで来られたとしみじみ思ひ
ます。特に車椅子生活になってからもなお、教場
の皆様の思いやりや、会館の方の計らいで吟を続
けることが出来ていることは、私の大きな生き甲
斐になっています。鼠は用意周到な牛にちやっか
り助けてもらうなんて、考えてみるとやつぱりず
るいのかも知れませんか。

地区ラジオ体操のご縁

みなとみらい 西多 英治

東京生まれ・東京育ちが平成六年に横浜駅近く
のポートサイド地区に転居しました。以来新しい
街に馴染みながら健康のため毎朝「みなとみらい
地区」の臨港パークまで散歩を続けています。こ

の公園で或るご夫婦が始めたラジオ体操に老若男女が加わって早くも二十年になり、参加者も三十余人になりました。

この仲間の中に日頃から詩吟を楽しまれる田川教場長がおられ、平成二十九年に「みなとみらい教場」開設のご案内を頂き、心身共に健康に役立つ詩吟の効用を知り数人の仲間と直ちに参加しました。

以来二年半、鈴木会長の直接のご指導を賜り詩吟の楽しさ、奥深さを感じ始めたところです。またま鈴木会長とは同年同月生まれで誠に有難いご縁を頂き、共に健康で令和の年を重ねて行きたいと念じています。

七たびの子歳

清水 山根 敏男

つい最近傘寿を迎えたと思っていたのに、アツという間に本年は年男。新聞のコラムに「病や老いなど苦悩はあっても、それに打ちのめされない負けない心、強い心、広い心、豊かな心を培い、生き甲斐を持つことです」とありました。

清水教場に入会して早や二年。毎回教場長や先輩方の励ましを追風になり、頑張れる糧になっています。

生涯青春の心意気で！詩吟は今私の「生き甲斐」になっています。



年男の余話

丸の内支部 坪川 竜泉

半世紀以上前、詰襟学生服姿の私達は国立競技場のアンツーカーを行進していました。出陣学徒壮行会ではなく、平和の祭典・第十八回近代オリンピックアードの開会式のリハーサルでのことでした。都立高校生徒達が各国選手団の代わりとして動員されたものでした。

私達のクラスはフランス選手団として、競技場のトラックを回りフィールドへ整列しました。昭和天皇の開会宣言のお言葉こそございましたが、本番と同じプログラムで進められました。高校一年十六歳の秋でした。幾年月、紅顔の何とも古希を過ぎてしまいました。

子年は十二支の一番目です。オリンピックも開催されます。中伝「山」の昇伝審査も迎えます。節目の年と考えております。気を丹田に集中させ、肩を沈めて深く息をし、一言一句を丁寧吟じていく所存です。

縁を得て

新陵 竹森 伊泉

「袖触れ合うも多生の縁」の縁（えにし）を得て、新陵教場（岳精流は後に知る）という同じ大学卒仲間の詩吟の会に誘われ参加。楽しくて、楽しくて！声張り上げて気分も爽快。ゴルフ場への往復の車の中の吟は音響効果抜群で上達した気にもなり、早や足掛け六年。先輩吟士共々六

年の齢を重ね、××。さて向後何年続けられるのか？元気の素、妙薬「吟」を飲み続けて次の年男に向かうとするか？！ 健吟！健吟！

最後に、教室提供の明治安田生命さんと鈴木大先輩に感謝。

人生百年・詩吟で肺炎防止

生田 関根 紀泉

日本人の死因第三位、年間一〇万人が肺炎で命を落としています。その原因として挙げられるのは加齢により肺、横隔膜などの呼吸機能と声帯をはじめとする「のど」の機能低下によるものだそうです。「嚥下」「発声」「呼吸」など三大機能が生命維持と深く関りがあり、人間は「のど」から衰えていく生き物だそうです。

肺炎で死亡した人の九割が誤嚥性肺炎で、中でも多いのは嚥下機能「飲み込む力」の低下だそうです。この病を防ぐためには「のどを鍛える」と、声帯を使うことが非常に有効とのこと。今私たちが知らず知らず元気でいられるのは、毎日詩吟を詠じ「のど」を鍛えているおかげだと思っています。吟を楽しむことが吟力の向上につながり、又健康な生活をつくり出していると私は信じています。

人生百年、健康志向の高まっている中、吟詠が身体に良いことを、もつともつと広められればと願っています。

前回の年男は病床で迎えた。お陰様で今回は無事に迎えられそうである。病後、それまで楽しんでいたドライブや海釣り、ゴルフなども出来なくなり、また仕事もリタイアとなり、通常であれば日々何をして過ごそうかと悩むところであるが、現在の私のスケジュール帳は結構書き込まれている。勿論、それは五年前に勧められて始めた詩吟の予定が大きく貢献しているからである。

吟の上達は横に置くとして、多勢の吟友、諸先輩、諸先生の知遇を得て楽しい時を過ごさせて頂いており、真に感謝に耐えない。もともと家内からは時にやり過ぎとの叱責を受けるこの頃であるが、自分で歩いて教場まで行ける間は頑張ろうと思っている。さて次の年男はどうだろうか。

《教場だより》

芝大神宮秋季大祭奉納吟

清水 星野 久風

清水教場関連四教場（清水・中野・逗葉・石神井）では芝大神宮参集殿をお借りして時折練習をしている縁から、今年も秋季大祭（九月十一日から二十一日までの通称芝明神ののだらだ祭り）期間中の十二日、詩吟を奉納した。

当日は鈴木会長も参加され、十一時集合し練習後十二時拝殿に参内。神官による祝詞奏上、お祓

い、会長と教場長による玉串奉奠のあと各自力一杯吟詠した。

大竹まり子「名槍日本号」、落合正泉「不識庵機山を撃つの図に題す」、原口美山「静夜思」、櫻田謙山「名槍日本号」、笹倉和江「九月十日」、市倉妙山「春夜」、神谷知山「半夜」、金岡博泉「独柳」、金井俊泉「舟中子規を聞く」、矢崎春泉「九月十三夜陣中の作」、湯浅和山「諸生と月を見る」、小蔦正山「中秋月を賞す」、三好弘山「新涼書を読む」、山根敏男「壇の浦を過ぐ」、森兼康博「海南行」、松岡省泉「春寒」、堀田宣山「自ら遣る」、森坂雄泉「南樓の望」、細川修山「九月十三夜陣中の作」、船津英風「飯盛山に白虎隊を弔う」、星野久風「汪倫に贈る」、徳本龍治「秋思」、村上精道「至善」最後に鈴木会長の「菊花」で締めて頂いた。

吟詠中にも拝殿前には参拝者が列をなして拝礼し聴き入って下さっていた。



教養講座

立山を望む

夢見名山四十年

天明日出驚相揖

国分青崖

暮投山麓只雲煙

玉立群仙在我前

詩歌研修会 中屋明泉

◇国分青崖（一八五七—一九四四） 明治から昭和にかけて活躍した漢詩人。名は高胤、字は子美。仙台の人。青崖または太白山人と号した。『青崖』は仙台青葉山の崖から、『太白山人』は仙台富士の異名を持つ太白山の意にとった。藩学の養賢堂で国分松嶼に漢学を、落合直亮に国学を、岡鹿門（千仞）に漢詩を学んだ。

一八七四（明治七年）十八歳の時、上京して司法省法学校に第一期生として入学したがその夏の関西旅行中、弊衣破帽のゆえに拘束される珍事があった。翌年、賄征伐（調理場荒らし）のいたずらがこじれ退校した。同時に退学した者に原敬、陸羯南、福本日南、加藤拓川ら他日、名を成した者が多い。何れも皆、青崖を大切にすると伝えられている。

明治十七年、学習院院長 谷干城の下で生徒監を務めた後、朝野新聞、第一次高知新聞の記者を経て一八八九（明治二十二年）創刊の日本新聞に陸羯南に招かれて参加し、時事批判の詩「評林」の筆を執った。

知己に副島蒼海がいた。三条実美の日光の別荘での詩宴の席上、青厓は古詩「風雨觀華嚴瀑布歌」一篇を試みたが蒼海はこれを激賞、青崖の詩名は一躍天下に高まったという。が、日露戦争前、痛烈な批判が当局を刺激し一九〇三（明治三十六年）十一月の『檜可斬』（檜斬るべし）や翌月の『植物類』は発禁処分を受けている。これら「評林」の詩を集めたのが『詩董狐』である。

長らく詩壇から遠ざかっていた青厓は大正八年に興社・詠社を再興して詩壇に復帰し大正、昭和の詩壇における権威と仰がれた。青崖の詩作は三万首とも五万首ともいわれているが、詩集は「評林」第一集の『詩董狐』しか出版しなかった。

恬淡無欲、名利を求めない高潔な人柄だったと思われる。太平洋戦争の敗色が深まる中、昭和十九年三月五日に没した。享年八七歳。墓は多磨霊園にある。共に眠る妻操子は歌人・教育者である。

【解説】立山の麓に宿泊した翌日の明け方、その山容を望んで感激を述べたもの。中年期の作。

【語釈】*立山……富山県東部、飛騨山脈北部の高峰。雄山、別山、浄土山など連峰の総称。最高峰の大汝山は三〇一五メートル。頂上に雄山神社があり、古くから信仰のための登山が盛んで富士山、白山とともに日本三霊山に数えられる。東斜面は黒部溪谷に落ち込み、氷河地形が多く西斜面には

弥陀ヶ原の溶岩台地が広がり、みくりが池の爆発火口湖や噴気孔の多い地獄谷がある。作者が宿泊したのはどの方面の山麓かは不明。*投……宿泊する。*雲煙……雲や靄。*揖……会釈する。中国の会釈の仕方。両手を胸の前で組み合わせて上下し、あるいは前に押しすめて先方を敬う気持ちを表わす。*玉立……潔らかに美しく立つさま。*群仙……多くの仙人。それを玉立する山々に見立てた。

【通釈】名山に憧れて四十年来この立山を夢にまで見続けてきた。昨日暮れがた山麓に着き宿から眺めたが、雲や靄が一面にかかって何も見る事ができなかった。今日天が明け、陽が出て山の姿が現れ出したので驚いて思わず丁寧に会釈をすると、潔らかな雪に輝く連峰が並び立つ仙人のように目前に迫っているのであった。

【鑑賞】山水を好んだ作者は凡そ天下の奇勝と名のつくものは殆ど訪ねた。特に立山は日本三霊山の一つである。四十年来夢想して果たせなかったのをこの時果たしたのである。「驚相揖」はその初対面の感激を如実に伝えている。雪に輝く連峰をたおやかな群仙に見立てたのは奇想というよりは実感であり、まことに迫真の妙がある。



【新 会 員 紹 介】

◇金町教場

安部 幸子さん（十一月入会）

ラジオ体操を始めて三十年になります。体を動かすことが好きで去年は東京都からラジオ体操

実践指導を通じて普及発展への努力が認められ個人表彰状を頂きました。体力の続く限り頑張ります。趣味は音楽、山登り、習字、お料理は食べるのも大好きです。

辻野 早苗さん（十一月入会）

女性としては勿体ないほどの竹を割ったような江戸っ子です。浅草に生まれ育ち、おしゃれでセンスよく、とにかく格好良い方です。ラジオ体操では、いつも楽しい話をしてくださいます。

◇桜ヶ丘教場

新井 良枝さん（十一月入会）

日々の生活では大きな声を出すことがないので詩吟は声を張って気持ちがよく、ストレス解消にもなるかなと軽い気持ちで始めましたが、奥が深くわが身の愚かさを恥じ入っています。皆様のご指導の下、しっかりと奥義を学んで行きたいと思っています。

◇調布教場

櫻田 浩氏（九月入会）

調布市の公報詩吟募集欄が目止まり、村林さんに電話し、勉強の方法を聞いて見学申し出、教室の感じも良かった。すぐ入会しました。流派の違いはありますが続けられそうです。水害に遭い一時は気持ちが沈みがちでしたが、詩吟頑張ってみます。

◇草加教場

長瀬 幸江さん（九月入会）

この度、入会された神田教場山崎楊風さんの友人長瀬ユキエさんを紹介いたします。数十年振りに会い、話をしているうちに吟をやってみたいと

のこと、漢詩の素晴らしさ、声を出す楽しさ、仲間との語らい等を共有できると思い、是非にと勧められました。これから詩吟を共に学んで行こうと思われています。皆さん宜しくご指導お願いします。

昨年入会された新会員

千代田岳精会によるこそ、心から歓迎します。一緒に詩吟を楽しみましょう。

(十二月入会の方は編集の締切り日程で令和二年にご紹介となります)

一月	桜ヶ丘	岸本 良江さん
	新陵	吉田 勇夫氏
	新宿支部	高橋 和義氏
	新宿支部	岡部 正彦氏
二月	ハザマ支部	丸岡 昭夫氏
	鎌ヶ谷	三代川 栄子さん
三月	東陽町支部	堀口 豊氏
	清流	岩田 美恵さん
四月	神楽坂	横田 恭之氏
	神楽坂	白井 洋子さん
	石神井	落合 京子さん
	みなとみらい	川西 寛氏
五月	東陽町支部	中西 幸子さん
六月	日暮里	井上美智子さん
	清流	妹尾 恭代さん
	熊谷	荒井 晃氏
	石神井	大竹マリ子さん
七月	金町	糸賀さとみさん
	金町	村松 幸子さん

八月 石神井 望月 桂子さん
鎌倉 伊藤 春雄氏

九月 新宿第四 神津美砂子さん
草加 長瀬 幸江さん

十月 調布 櫻田 浩氏
桜ヶ丘 中村ミツエさん

鎌ヶ谷 谷川 治弘氏
神田 中野さと美さん
みなとみらい 福原 文雄氏

十一月 草加 辻野 早苗さん
桜ヶ丘 新井 良枝さん

金町 安部 幸子さん
金町 西室 正彦氏
みなとみらい 藤木 成子さん

入会後、休会された五名の方は記載しております。

復会のご挨拶を頂きました。

卒寿再び門に入る

草加 西村 邦男

二年程前、体調を崩して会を離れていましたが最近やゝ回復。詩吟の楽しさ忘れ、再び入門のお許しを得ました。主に草加と金町教場に参加しますがご指導ご厚誼の程、宜しくお願い申し上げます。



編集後記

平成天皇が退位され、新しい令和の時代となった昨年は皇位継承の諸行事が皇室で行われた。私達戦前と区分される世代だけでなく、戦後派の皆さんも二度目となるが、天皇が確認できるというわれる時代から約千三百年、形は異なるであろうが連綿と続いている国家と神事は世界でも稀なことだろう。

象徴天皇として、日本国民の心の拠り所としてこれからもあり続けて欲しいと願っています。

昨年の千代田は一く十一月で教場開設二か所(実質はもう一か所)新会員の入会数は三八名でした。これは千代田創立二十年から二十五年の時代に匹敵する人数で、詩吟界全体が高齢化傾向にある中で際立った実績と申せましょう。更に入会のルートも、新会員紹介欄を見ても知人・公報紙・チラシ配布・地域行事の参加・ホームページと多岐にわたっていることが分かります。

教場の所在地は東京都及び神奈川・埼玉・千葉の三県にあり、地域との関わりにそれぞれの教場が工夫を凝らしている努力が効果を挙げているようです。

令和として初めての新年号をお届けします。会員の皆様からの寄稿を中心に本年も編集を続けてまいりたいと思っています。ご協力への感謝と共に今後も宜しくお願い致します。

(八田 龍仁)